
オレンジの夕日

蹴球少年

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

オレンジの夕日

【ZPDF】

N7271G

【作者名】

蹴球少年

【あらすじ】

ブランコとすべり台のある公園で、ぼくは女の子に会った。僕は女の子に惹かれ、いつの間にか好きになっていた。心地よい時間が、ぼくを幸せにしていた。

ぼくがあの人に会ったのは、ブランコと滑り台がある公園でだった。

ぼくは公園に独りでいた。

友達はいなかつた。

何人かの子が鬼ごっこをしていた。

ぼくはそれを見ていた。

「うらやましいとか、そんなことを思つたことはない。

そりや友達がほしいと思ったことがないわけじゃないけど、それは無理なんだと言い聞かせてきた。

子供たちがあまりいないブランコの周りをうろついてみる。

イスに飛び乗つて、軽く揺らす。

『キイキイ』と心地よい音がした。

なんとなく眠たくなつてちよつとまぶたを閉じた。

やがて目が覚めたとき、あたりはオレンジ色でいつぱいになつていた。

そつと周りを見渡す。

ぼくはギョッとした

目の前に女の子がいた。

「君、ずっと独りでいたよね？」

見た感じよりもずっと大人っぽい声。

「私と遊ばない？他の友達みんな帰っちゃって」

女の子がぼくに話しかけている。

その女の子は、ぼくがずっと遠くから見ていた女の子。

穏やかな雰囲気で、ぼくはなんでだか彼女に惹かれていた。
近付くことはないとわかつっていたけど、どうしても惹かれるといつ
があった。

そんな女の子が、ぼくに話しかけている。

相手を間違えてるんじゃないかと思つた。

でも、そのまますぐぼくを見ていた。

「君もまだ帰らないんでしょう？ だったら大丈夫だよね」

ぼくはオーデオをじていたけど、やつぱり嬉しかった。

女の子は笑って「ブラン」の上に立つた。

そして2人で「ブラン」を揺らしていた。

女の子の笑った顔を見ていて、幸せを感じた。

その日を境に、女の子はよくぼくのところへ遊びに来なくなった。

ほとんどは遊び友達が帰っちゃったからだったけど、ぼくはそれで満足だった。

辺りがオレンジに染まる、夕焼けの、幸せな時間。

それを待つていつも「ブラン」を揺らしていた。

今日も女の子が近付いてきた。

いつもの笑顔。

友達に向けているときと変わらない、でも今はぼくだけに向けられている。

「君どころか、本当に楽しい気分になれる。なんだか不思議な感じ」

そんなセツノが、ぼくをもつと幸せにした。

帰り際に見せるちょっと切なげな瞳も、少しのせびしい気持ちと一緒にすぐつたくて心地よかつた。

何日も過ぎて、ぼくはどんどん女の子を好きになつていった。

気付いたときには、その想いがどうにもなべらに大きくなつていた。

そんなある日、こつものやつブランコを揺らしていたら、女の子が暗い顔をしてぼくのところに歩いてきつた。

まだいつもより早い時間。

「あのね、私、もうすぐ遠くに行かなくちゃダメなの。お引っ越しするんだつて。だから、今日はお別れを言いに来たの」

ぼくは驚いた。

そして、ショックで固まつた。

規則的に揺れていたブランコがゆっくりと止まつたのに気が付かなかつた。

女の子がいなくなる?

今までのぼくの日常がひつづ返る、そのことに今は耐えられそうになかつた。

女の子が話しかけてくる前までなら、友達がないのが当たり前だつたときならなんことなかつた。

でも、今は違う。

ぼくは女の子が好きで、離れるなんて考えられない。

「だから、今日でお別れだね。私がいなくなつたら、ちゃんと友達見つけなきゃダメだよ？」

そんなことできない。

ぼくの友達は女の子しかありえない。

「え？？」

ぼくはたまらなくなつて女の子のひざに飛び乗つた。

「…………もう、仕方ないなあ」

女の子は優しく笑つてぼくの頭を撫でた。

心地よくて、いつまでもそのままいたくて、ぼくはそつと目を閉じた。

やがて目が覚めたとき、あたりはオレンジ色でこっぱになつていていた。

あくあくと周りを見回す。

誰もいない公園。

女の子も、他の子供たちも、誰もいない。

ぼく独り。

まだ頭に残つてゐる心地よさ。

女の子を想ひ出しあみる。

切なくて胸がキコッときじくなつた。

女の子を探しに行ひうか？

いや、それじゃあ女の子がせつかくお別れを言つてこきてくれた意味
がなくなる。

ぼくは、このブランコで女の子がもう一度やつてくのを待つてな
きゃダメだ。

女の子のことが好きだったから、ぼくは待つてなきゃダメだ。

だから、今はまだ聞こえなくても、囁いてみよ。

本当に好きだった気持ちを。

もう一度会いたいから。

「一いち

うふと気持ちを入れた一聲。

まくはブランコに飛び乗って、さつと畠を開いた。

畠を開いたときこ、オレンジ色でこっぽいの公園に女の子がいます

せめへ、夢の中でだけでも会えますよひ・・・・・。

うふ。

オレンジ色でこっぽくなつた頃、僕は畠を覚ました。

(後書き)

閲覧ありがとうございます

ほのぼのとした話を書いてみたくなつて書いてみました。

ちよつとでも穏やかな気持ちになつていただければなと思います。

よろしければ感想のほうもいただけましたら嬉しいです

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7271g/>

オレンジの夕日

2010年12月2日15時23分発行